

## 市街地における歩行実態と歩きやすい街路空間に関する研究

姜, 気賢

<https://doi.org/10.15017/1785344>

---

出版情報：九州大学, 2016, 博士（工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済



氏 名 : 姜 気賢

論 文 名 : 市街地における歩行実態と歩きやすい街路空間に関する研究

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

日本の高度経済成長に伴うモータリゼーションの進展と、都市の自動車交通を支える道路網の整備は、人々の日常生活圏を拡大し、物資輸送の大量化と高速化を促進し、市民生活における利便性の向上や都市圏の人口増をもたらした。その一方で、郊外へのスプロールとそれに伴う中心市街地の衰退、自動車利用の増加による交通渋滞と環境の負担増、高齢者や運転弱者の日常生活への悪影響、街路におけるヒューマンスケールの喪失などの様々な問題を引き起こし、地域の持つ歴史的、文化的な特徴を変質させ、都市の活力と生活の質の低下を招いた。近年になって、自動車交通を主とした都市づくりを見直し、人間中心の都市空間を取り戻そうとする動きが活発になり、人々が住み続けたいと思えるような魅力のある都市の街路空間の整備が求められるようになってきた。

そこで、本研究は、日本の地方中枢都市である福岡市を対象として、福岡市全域における人々の歩行特性と傾向、都心部と郊外部における歩行の特性と傾向、移動の実態と歩行に対する歩行者意識を明らかにするとともに、街路への歩行者の入りやすさ、歩行の意思を高める街路の物的要素を明確化することを目的としている。

本論文は、序論、本論及び結論の6つの章により構成されている。

第1章では、序論として、研究の背景、目的、方法について述べ、本研究の意義をまとめるとともに、既往研究を整理し、本研究の位置づけを明らかにした。

第2章では、福岡市のパーソントリップ調査のデータを用いてクロス集計を行い、GISの地図上に示すことにより、福岡市全体における人々の移動は、移動主体である個人の属性や目的によって移動手段が異なり、都心、広域拠点、鉄道駅周辺の地域特性に関係することを明らかにした。また、歩行移動に着目し、性別、職業、自動車所有の有無、年齢変化と歩行移動の関係、地域による歩行率や歩行時間の差異を明らかにした。

第3章では、福岡市のパーソントリップ調査のデータと国勢調査データを用いてクラスター分析を行い、福岡市全域を「都心型」と「郊外型」に分類し、それぞれの地域に住む人々を対象としたアンケート調査により、歩行に対する意識を明らかにした。また、歩行の目的などの個人的な要因以外に、施設の近接性や充実度、アクセスの容易性などの環境的要因が歩く行為の促進に影響することを示した。さらに、歩行に対する好き嫌いにより、積極的に歩く人と、消極的に歩く人が存在し、歩行に対する好き嫌いは、地区への愛着の有無、コミュニティにおける知人の数等に関係があることを示した。

第4章では、福岡市都心部のうち、建物用途が混合し、様々な道路幅員がみられる春吉地区を対象として、歩行者ルート及び対象地の物的環境調査、歩行者通行量調査を行い、歩行者は、日常的な歩行の目的地としての商業施設が沿道に立地している広幅員の街路を歩く傾向のあることを示した。また、歩行者133人を対象としたアンケートにより、歩行ルート選択時に影響を及ぼす要素に

関する分析を行い、歩行ルートを決める場合には、「目的地までの最短距離」、「車の少なさ」、「道路の幅員」を重視するが、歩行の目的により優先する項目の割合が異なることから、歩行者の意識と歩行実態との差異をふまえた街路の整備が必要であることを示した。

第5章では、福岡市春吉地区を対象として、中心市街地の街路の「入口」、「アイストップ」、「遠景」に関する33件のモニタージュ画像を作成し、被験者に対する印象評価実験を行い、歩いて進みたくなる街路の要因を明らかにした。すなわち、人々が街路を見て感じる視覚的情報が要因となり、街路の入口から見える公園の緑、飲食店舗、ランドマークとなる建物などの印象が、街路に対する不安感を減らして印象を良くし、道先の期待感を高め、街路の歩行を促進する要因となることを示した。

最後に第6章では、上述までの章を通じて得られた知見を総括し、本論文の結論とした。